

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日掲載
令和二年十二月一日発行
第百二十三巻第十二号

ホトトギス

十二月号



風雅の小筥（三十四）

廣太郎

先月は「コロナ禍」の事について述べたが、現在令和二年九月末の時点では未だその新型コロナウイルスは収束したとは言えない状態にある。それでも徐々に句会等の俳句に関するイベントは少しずつ復活してきているようである。勿論色々制限はあり、会場へはアルコール消毒をしてから入り、常時マスクを着用し、ある程度の距離を置いて着席するなど少し不自由を感じる人も居るのかも知れないが、暫くは我慢しなければならぬだろう。私も毎月芦屋へ行き芦屋ホトトギス会等の事由に参加出来る句会には出席するようになったが、特にこの芦屋ホトトギス会は稲畑汀子ホトトギス名誉主宰が主催者の事もあり、少し密になつていのように感じた事も事実である。今後の課題なのかも知れない。

句会といえば、東京で私が選者をしてい、ある東京の区立の俳句関係の記念館での会の話であるが、ある句の俳句のイベントの為にその会の様子を撮影したいとの事で勿論快諾した。カメラは会の様子を最初から最後まで撮影したが、放映されるのはその中の数分だそうだった。そして会の後、私一人がカメラを前にインタビュウを受ける事になった。勿論俳句についての質問で、この時とばかり季節の大切さを話したところ、カメラマンを兼ねていたインタビュアが突然カメラを止めて「すみません『キダイ』って何ですか？」と質問してきた。「季節」と言うところの言葉は知っていた。何か暗澹たる気持ちになつてしまった。

旬日記 汀子

令和元年十二月一日 下萌旬会

雨止みて空取り戻す冬の朝
気のつかぬ冬芽気付きしよりのこと

十二月二日 ロイヤル俳壇

冬帝に委ねし友のことばかり
冬の朝雨に気づきしよりのこと
何にでも葱は我が家の隠し味
何一つ変らぬことも冬の朝
旅一つ残して師走なりしかな

十二月三日 有恒俳句会

恒例の冬あたたかき苑庭に
見え隠れして名苑の冬日浴び
スケジュール巡る名苑年忘
ほどほどに掃かれし落葉彩れる
鳥の声落葉くぐりて庭巡る
すれ違ふ人に声かけ石路の花

十二月三日 無名会

暮れてより短日忘れをりにけり
この後になほ予定ある師走かな
予定組む三つの会といふ師走
夕影を置きそめしより年忘
散紅葉掃かれぬことも一風情
冬日浴び名苑の池一と廻り
映るものありて水面の十二月

十二月三日 日本伝統俳句協会忘年旬会

友癒ゆる日を待ちつつの年の暮
一年を振り返る年忘かな
忙しき心沈めて年の暮

十二月七日 菅屋ホトトギス会

年忘めいて北から南から
日向ぼこ世間話は又のこと
千鳥の洲訪ひたることも一と昔

十二月十日 大阪倶楽部

欠席は師走の怪我と聞き及ぶ
訪ふときは八つ手の花の勝手口
時雨れても時雨なくとも訪ふことに
まだ馴れぬ寒さに処して行く旅路
病む友も怪我せし友も師走かな
寒いとは言つて居られぬ旅路あり

十二月十日 綿葉倶楽部

短日を使ひ切つたる帰路となる
残る葉を隠れ糞ともして冬芽
耐へることすなはち冬芽なりしかな
二つ目の会は短日なりしかな

十二月十二日 清交社

クリスマスツリー飾りて旬会場
数へ日と思ふまだまだとも思ふ
昨日来て今日も大阪冬霞
忙しさは口には出さず年の暮
クリスマスらしき配慮のある旬会
短冊を止めたる鈴もクリスマス
冷たき手詫びる握手でありしこと
短日や二つの予定組まれたる
淡々とすることをして師走かな

十二月十三日 工業倶楽部

散るものは散りて冬木となりけり
葉を落し切れざるままに冬木かな
十二月十四日 九州ホトトギス俳句大会前日旬会

師走とは思へぬ歩幅旅心
短日の旅に列車を選び来し
十二月十五日 九州ホトトギス同人会

朝月の光の失せてゆく寒さ
ふり返る旅路師走もはや半ば

旅師走 桜島にも名残あり
十二月十五日 九州ホトトギス俳句大会

桜島山容峨々と冬ざざる
年用意心に置きて旅にあり
南国の旅に師走の心解く
十二月十八日 夏潮旬会

隙間風無きが如くしありにけり
掃く落葉残す落葉も客設け
なほ二つ待つてある旅師走かな
誰彼に問うて満天星紅葉かな
誰彼の揃ひしことも師走かな
十二月二十日 時雨旬会

数へ日といふ気分とはまだ遠し
クリスマスリースに偲ぶ友のこと
旅立の一步に踏み霜柱
数へ日の旅なほ一つ残したる
足音の近づいてくるクリスマス

十二月二十日 アネモネ旬会

短日の三つ目となるスケジュール
マフラーを巻きて身軽く出掛け来し
クリスマス近き東京タワーの灯

廣太郎旬帳

廣太郎

令和元年十二月一日 野分会菅屋例会

河豚の肝食べて中りし人のこと
 凍星に見透かされたる嘘一つ
 鱈酒に吐き出してゐる妻の愚痴
 二人には明る過ぎたる冬の星
 冬の星祝賀歸りのほろ酔に
 十二月一日 青嵐会菅屋例会
 凍星を見上げ涙は拭はざる
 鴨浮寝人との距離を保ちつつ
 十二月三日 カトリック新聞選者吟
 日本に恵み携へ小鳥来る
 十二月四日 NHK文化センター
 夕星を引つ張り上げて暮早し
 冬芽抱く街路樹といふ孤高かな
 十二月五日 蕉心会
 冬帝に連れ去られたる君のこと
 冬の雲鱗崩れてゆく仔細
 冬紅葉日差に色を足してゆく
 冬うらら川の流れば渦となり
 黄落をためらつてゐる一樹かな
 竿数多並べ冷たき釣果かな
 一片の山茶花庭の句読点
 十二月六日 六甲会
 大阪のをばちやん年の市値切る
 本社移転して年の市近付ける
 人込みを見に来たやうな年の市
 豊岡の城主偲びて松葉蟹
 饒舌が江口に松葉蟹食らふ
 底冷の江戸蒼穹の浪速かな
 松葉蟹奮る教皇ミサ帰り
 十二月七日 芦屋ホトトギス会
 教皇の去りし日本の山眠る
 日向ぼく教皇ミサの聖歌めき
 千鳥鳴く教皇ミサの聖歌めき

立錫の余地なき芦屋納句座
 十二月八日 「田鶴」六百号記念祝賀俳句大会
 冬紅葉より天守閣羽搏ける
 祝ぎ色に天守染めゆく冬日かな
 黄落の道祝ぎ心携へて
 十二月九日 朝日カプチヤ若草句会
 冬帝の威に沈みゆく摩天楼
 冬至粥開より湯気の香り来る
 冬帝に塗り替へられてゆく並木
 白鳥に水の固さの解れゆく
 冬至の日勿体振つて沈みゆく
 白鳥の菜となりゆく水面かな
 十二月十日 ひまわり俳壇新年挨拶
 新しき元号に馴れ去年今年
 十二月十一日 十葉会
 黄落の闇を眩しくしてをりぬ
 本鮎太西洋を知り尽し
 恋破れ霜夜の帰路でありけり
 タワいの秀冬ざれ天に放ちゆく
 公園の芝の先より冬ざるる
 ボルドーを寝酒と決めて霜夜かな
 十二月十四日 九州ホトトギス同人会、大会
 播磨の賀終へて薩摩の冬ぬくし
 飛葉踏む維新の音色響かせて
 薩摩降りてより南国の冬日和
 薩摩琵琶冷たく歴史語りをり
 噴煙に加勢したてゐる冬霞
 冬風を割りてフェエリーの江りゆく
 十二月十七日 北國文芸選者吟
 冬雲を押し上げ火山灰の静寂かな
 十二月十八日 「田鶴」近詠
 落すもの落し公園冬ざるる
 大江戸の色を尽して冬ざるる
 霜夜行く恋に疲れて男かな
 きりきりと霜夜の叫びありにけり
 弁当を開けて冬ざれ遠ざける
 十二月十八日 目黒学園句会
 古曆あと一枚といふ重み
 ストーブの特等席は猫のもの

年の夜に二人の未来ありにけり
 暖炉燃ゆアールヌーボー調の部屋
 ストーブを焚いて列車はみちのくへ
 十二月十九日 北國新聞新年吟
 改元の未来信じて御慶述ぶ
 十二月十九日 前議員句会
 冬帝に縮み切つたる都心かな
 官邸の竹林傾ぎ冬ざるる
 十二月二月てふ言の葉に戦けり
 十二月十九日 登高会
 ホトトギス火鉢抱へて編みし虚子
 一本の出刃鯢鯢の味を決め
 鶴塚を鎮めて芦屋川潤るる
 神の威を閉ぢ込めて滝淵れにけり
 百年の鯢鯢鍋屋てふ矜持
 十二月二十日 廣邦会
 枯鳥行く一番星を追ひかけて
 水鳥に大琵琶の景狭められ
 水鳥に攻め落されし城の濠
 十二月二十日 青嵐会東京例会
 黄落を大地の鼓動受け止めて
 冬枯や名苑といふがらんどう
 公園の花壇冬ざれてはをらず
 一本の黄落園の要とす
 漆黒を灯し冬至の明けてゆく
 十二月二十日 野分会東京例会
 波音も馳走としたる河豚の宿
 凍星を追ひかけ句友一人逝く
 凍星の灯近付けてゆく冬の星
 河豚食うて帰路は三途の川渡り
 十二月二十四日 若水句会
 思羽に包み込んで騒ぎかな
 極月の神の杜てふ騒ぎかな
 鶯鶯の七色弾けたる水面
 鱈汁や蝦夷の風音閉ぢ込めて
 救ひ主てふ極月の贈物
 十二月二十五日 カトリック新聞選者吟

雑詠

廣太郎 選

冷房の効くの効かぬの窓の雨 東京 今井千鶴子
 八月も無為に過ぎゆく風の色 同
 わが窓に見ゆる宇宙や流れ星 同
 掛香やししのぶ 椿子物語 西宮 本郷桂子
 梅雨に逝く虚子の語部また一人 同
 灯涼し 椿子人形化身とも 同
 落石の止みし静寂をほととぎす 米子 中村襄介
 トラックを出で大夏野へと走者 同
 花合歓や三瓶の旅の遠くなり 同
 御霊来て夜の風鈴を鳴らしけり 静岡 須藤常央
 風鈴の風と鬨ふ音となる 同
 強風に風鈴音を失へり 同
 飛魚に神の与ふる翼かな 高松 永森ケイ子
 飛魚の海より青き空を見し 同
 飛魚や翼にならぬ 鱈開く 同
 首すぢに十一月の空気かな 東京 今井肖子
 鳥のこゑ降る降る落葉踏みゆけば 同
 山鳩のうすむらさきの脚寒し 同

孀恋の愛妻の丘月見草 群馬 中杉隆世
 月見草涙を溜めてゐるごとし 同
 撫子のうすくれなゐの睫毛かな 同
 流星の速し祈の長かりし 神戸 和田華凜
 どことなく手花火の夜の濡れてぬし 同
 手も足もはしやぎて島の踊唄 同
 胸中に峰雲育ちつつありぬ 熊本 岩岡中正
 青春の挫折いくたび雲の峰 同
 天上は私の故郷雲の峰 同
 カンナ咲きうさぎ当番登校す 神戸 藤井啓子
 虫払姫の逢瀬の絵巻物 同
 路地に子らあふれし頃の大西瓜 同
 少年の日よりの俳書徴びさせず 相模原 木村享史
 友情といふ徴びさせてならぬもの 同
 紙の辞書徴びさせいまは電子辞書 同
 幸せは等分にしてメロン切る 神戸 山田佳乃
 羅の袂に夜の透けてをり 同
 香水の一滴に夢取り戻す 同
 徳依に溜る葉屑や宮相撲 東京 田丸千種
 島ひとつ背負ひ出でたり相撲取 同
 星今宵二人家族のひとり留守 同
 一本の手花火闇を大きくす 神戸 涌羅由美
 太陽の匂ひの子等の髪洗ふ 同
 会釈てふ涼しき距離のありにけり 同

雑詠句評（十一月号より）

虚子像にいただく勇氣梅雨の日々 東京 今井千鶴子

一読して、この作者のへ向き合ひて虚子に学びし花の日々」が思い出された。『花の日々』は、句集名ともなっており、「あとがき」には、「若い私が虚子先生と炬燵を隔てて相対し、いやいやながら口述筆記の仕事をしていた人生の花の時代」と記されている。

虚子像を作者が毎日拝しておられることは、「梅雨の日々」からも察せられる。作者にとつて虚子は、今も心に生き続ける特別な存在なのである。「力」でも「元氣」でもなく「勇氣」であるところに、このただならぬ時代を俳句を支えに生き抜いていかんとする作者の氣概が、ひしひしと感じられる。（眞理子）

虚子像といえ、東京都調布市にある深大寺のそれが有名であるが、その昔ホトトギスで頒布した像もあり、それをお持ちで毎日身近に拜んでおられるのだろう。数少なくなつた直接虚子に師事した作者の誇りは、この像を見る度に鬱陶しい梅雨も吹き飛ばす程なのである。（廣太郎）

生かされて今日人に会ひ立夏かな 神戸 千原叡子

作者は、入院療養の末、令和二年七月十一日逝去されたという。虚子の「椿子物語」ゆかりの人だけに長きにわたつて人々に愛され、微笑を絶やさぬ人であった。茲に生前をお慰び申しあげ、謹んで哀悼の意を表します。

さてこの句は、作者にとつて人生最後の立夏の日の句であろう。加えて令和二年は、新型コロナウイルス感染症拡大の騒ぎで、入院者や施設入所者にとつては、家族でも面会出来ぬほどの異常事態の日々であつただけに、「生かされて今日人に会ひ」という措辞には、言葉以上の大きな悦びの心情が託されているように思われる。何気なく平明に叙された句であるが、「立夏」という季節が見事に詠まれている余韻の深い句である。（葉）

悲しい事に作者の千原叡子様は令和二年七月十一日に幽明境を異にされた。虚子を知る方が又一人この世を去られ、淋しい限りであるが、最後まで前向きに俳句を詠まれた事がこの句からもひしひしと伝わってくる。病床におられても平明に季節を詠む御姿が却つて悲しみを誘う。（廣太郎）

天地有情

心子選

六甲の靈氣放ちて初音かな
 教室にバレンタインの日の孤独
 家居して偲ぶ吉野の花の宿
 何も彼も自肅さみしき祭笛
 梅雨憂しとせぬ恪勤を師に倣ふ
 百合白し謹厳居士の遊子の忌
 人間は水の塊梅雨しとど
 丁寧にしきんと思ふ夕端居
 ひぐらしの吉野の谷を満たしたる
 ひぐらしの声の枝垂るる如くにも
 誰も来ず何も話さぬ暑さかな
 母の忌は明日と思ひぬ今日も暑し
 夕風に優しくなびく月見草
 咲き満ちて夜の妖精月見草
 梅雨空へ天衣纏ひて旅立ちぬ
 いくたびも手を振る別れ夜の秋
 星今宵また会へる日を信じつつ
 星月夜地上を闇に沈ませて

東京 稲畑廣太郎
 同
 長岡 安原 葉
 同
 相模原 木村享史
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 神戸 三村純也
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 宇治 西村やすし
 同
 神戸 和田華凜
 同
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 同

同い年又一人逝く秋の蝶
 秋の蚊にさされて戻る夕散歩
 明易や虚子のもとへと一佳人
 百合の香にむせ城山の能舞台
 訣れてもなほ俳諧の虹わたる
 水無月や虚子の世を知る人の逝く
 引き留むる術なく逝かれ梅雨寒し
 もう会へぬうつつの縁梅雨深し
 五月晴目から鱗のそれはね誌
 五月晴遺せし季寄せ師の揮毫
 妻逝きて十八年や夜の秋
 長生きをしたると思ふ夜の秋
 日食の落日を置き夏至の空
 光より徐徐に薄れてゆく夕焼
 わたつみの庭へ里びと歌碑涼し
 玫 瑰やなべてひそやか浜の荘
 孀恋にいま妻とある涼しさよ
 忘るるといふを涼しき事として

鎌倉 星野 椿
 同
 東京 山田 閨子
 同
 西宮 本郷 桂子
 同
 芦屋 黒川 悦子
 同
 東京 河野 昭彦
 同
 同 川口 利夫
 同
 金沢 藤浦 昭代
 同
 千葉 大木 さつき
 同
 群馬 中杉 隆世
 同